アクティヴな学びを創り出す

人間科学部　人間科学科3年　大川原 みなみ

私たち生涯教育学ゼミでは、「アクティヴな学びを創り出す」をテーマに様々な取り組みを行った。2年次のコロナ禍に比べると、3年次は子どもと触れ合う機会が圧倒的に多かった。これまで私たちが経験してきた、ゼミ活動の一端を紹介したい。

■様々な企画運営を通じてどんな工夫をし、どんな役割を果たしたか

1年次の「クリスマスkids運動会」から得られたことは大きい。初めてのゼミでのイベントで何から決めていけばよいのか、何を目的にしていくのかなど考えることはたくさんあった。後日、参加したみんなからの感想で印象に残っていることがある。それは「もっと細かく準備をしておくべきだった」という言葉だ。イベントの内容自体はとても楽しく、遊びの対象である子どもたちも笑顔をたくさん見せてくれたという。たくさん動き回ったともいうので、目的である「冬の寒い時期だからこそ楽しく体を動かす」ことも達成出来ただろう。しかし問題は、イベントを行う寸前での準備だったという。大量の風船を膨らますのに時間が掛かり、道具を用意するなど、役割分担がしっかりできていない状況であった。

これから私が企画を考えていく上で最終的な目的から逆算して考えていく工夫をすることの大切さを学んだ。企画運営をしていく中で必要な要素は7点である。内容(what)、どこでやるのか(where)、いつ(when)、誰と(who)、なぜ(why)、予算(how)、どうやるのか(how)だ。この5W2Hを軸に最初に考えることが欠かせない。それぞれのイベントごとにこの5W2Hの中から特に重要なのは何かを考え、そこから順を追って考えるという工夫をした。

3年次の企画では、三ツ沢公園での「大学生と遊ぼう会」の子どもイベントがある。地域スタッフである〝ふれあいっこ三ツ沢〟の方々とのやりとりや遊び内容や当日の役割分担を考案した。「子ども目線」で何をやったら安全で楽しいのか、どういう時にどのような役割が必要になるのかなど、細かく考えながら決めた。

■学生自身、子ども、地域の方々にとってどのようなインパクト（効果）があるか

地域の活動団体と協力した子どもイベント企画運営が、学生自身、子どもたち、地域の方々のそれぞれの視点からどのようなインパクト（効果）があるのかを考える。

まずは学生自身について考えていきたい。これは企画を運営することの価値や意味を感じることができることであると思う。イベントを終えた後の達成感、もっと～するべきだったというような反省点はイベントを運営した者にしか分からない。当日までの間に何度もプログラムを考え直し、実際に自分たちで公園に行き子ども遊びを実践する。これらを何度も繰り返し、周りからたくさんのアドバイスを貰いながらイベントを成し遂げたことはどの大学生も必ず経験できることとは限らない。この貴重な経験を私たちはゼミの企画を通して得ることができたのだ。

次に子どもたちへの効果は何かである。これは新しい経験が出来ることだと思う。全ての子どもたちが大学生と触れ合う機会があるというわけではない。子どもたちにとってもこのようなイベントに参加し、大学生と一緒に遊ぶことができたことは大きな経験となるだろう。毎回同じ友達と遊ぶことはもちろん悪い事ではなく、親しい友人として深く関われていることはとても良いことだ。しかし、一定のメンバーとしか関わりをもたないとなると後々社会に出てたくさんの人と関わる機会があった時に、経験不足ということになってしまう。また、企画を運営する私たち学生も子どもたちが楽しめるように何度もミーティングや実践練習を重ねるだけあって内容も手厚く、子どもたちにとっても初めてやる遊びが多い。誰でも初めてのことをやるとなると、ワクワクするものだ。新しい遊びを知れるという意味でも大きなインパクトになっていると思う。

最後は、地域の方々に対する効果である。ここでは参加した子どもたちの保護者も含めていきたい。新型コロナウイルスの影響で以前に比べて子どもが家庭内で過ごす時間は圧倒的に多くなっている。すると同時に保護者の育児負担も増えているだろう。そんな時に、子どもたちと一緒に体を動かして遊べる若い学生が地域の活動を通して関わってくれることはとても有難いことなのではないのか。子どもたちにとっても一つの思い出として蓄積されるし、保護者にとっても息抜きの時間が確保できるだろう。また、ふれあいっ子三ツ沢の方々にとっては若い世代の意見を必要としていた。最近の流行など、子どもと年齢が近いからこそできることだ。一方、保護者にとっては、時間確保の効果、地域の方々にとっては新しい意見の取得としての両場面でインパクトになっているだろう。

■これまでの実践的活動と研究テーマへの接合

私たちは「アクティヴな学びを創り出す」をテーマにしてきた。様々な事業運営を介して、私たち一人一人に個性があるように、子どもたちにも一人一人個性があって好きな遊びも異なる。どの子どもも共通して言えるのが、「体力が想像以上にありすぎる」ということだ。まさに「アクティヴ」である。これは実際に子どもと触れ合ったからこそ得られた学びといえるだろう。また、積極的に地域交流を通してイベント事を企画・運営している私たちゼミ生は「アクティヴ」である。

私は将来教員になることを目指している。だからこそ、今ある関わりを大切にしながらアクティヴな教員になれるようにゼミ活動でも学び続けていきたい。